〔学界展望〕

ロシア近世経済史研究の新動向

土　肥　恒　之

(一)

1960年代にはいってから，アメリカにおける「旧体制下のロシア」研究は，各分野において多数の注目すべき成果をあげていることについては改めて指摘するまでもない。そしてこのことはロシアの近世社会――ほぼ17世紀から1861年迄を指す――に関しても例外ではないのだが，この時期に関する最近の研究上のトピックの一つとして，ロシアにおける資本主義（あるいは工業化）の起源とその担い手をめぐる諸問題があることについては余り知られていない。この問題への関心それ自体は，1950年代後半から1960年代前半にかけてソ連の経済史家の間で活発におこなわれた「ロシアにおける資本主義の起源」についての論争[(1)]を一つの媒介としているが，その研究視角は，現代アメリカの経済史研究の顕著な特徴をなしている，資本主義的企業経営の史的展開にたいする経営史的，企業者史的アプローチである，といってよいであろう。と同時にそれらの研究において，方法論的に重要な役割を担わされているのがドイツの著名な社会学者マックス・ウェーバー（Max Weber, 1864－1920）の社会学的歴史研究であることも，充分な注意に価すると思われる。この小論では，以上のような最近のアメリカ学界の動向に焦点をあわせて，その二，三の成果を紹介することにしたい。

原稿受領日　1979年1月17日

(1) 1960年代前半までのソ連における「起源」問題の研究状況については，И. А. Булыгин, Е.И. Индова, А.А. Преображенский, Ю.А. Тихонов, С.М. Троицкий, "Начальный этап генезиса капитализма в России.„ «Вопросы истории» 1966, №10, Н.И. Павленко, "Спорные вопросы генезиса капитализма в России." «Вопросы истории» 1966, №11 及び注(42)を参照。

(二)

「工業化」に関する業績で我が国でも広く知られているアレクサンダー・ガーシェンクロン[2]は，1970年に『ロシアの鏡のなかのヨーロッパ——経済史四講』という小さな著作を公けにしている。[3] この本の狙いは，西洋経済史家には周知の若干の項目でロシア経済史に光をあててみること（ロシア経済史のヨーロッパ化）にあるのだが，その際彼が取り上げた項目の一つが，「プロテスタントの倫理と資本主義の精神に関するマックス・ウェーバーの仮説」であった。[4] 即ちウェーバーの著名な論文（1904－05年）[5] で提起された仮説をロシア経済史に即して検討してみようというのである。ところでガーシェンクロンによって取り上げられたこの問題について，欧米学界は既に若干の研究史を持っている。彼の所説の紹介に入るまえに，多少この点を説明しておきたい。

ヨーロッパにおける近代資本主義の勃興における禁欲的プロテスタント諸教派の役割に関するウェーバーのユニークな指摘を，ロシア経済史に即して検討してみる試みが欧米学界にあらわれたのは，1950年代後半のことである。我々はその最も顕著な例として V. T. ビルの『忘れられた階級』（1959年）[6] を挙げることができるだろう。ロシアのブルジョアジーの歴史的概観を意図したこの著作のなかで，ビルは19世紀ロシアの最高のブルジョアジー（工業家，商人）のなかには，かつて正教会を批判し，そして分離したため異端の烙印をおされた分離派教徒（Old Believers, раскольники）が多数存在したことに着目し

(2) 例えば角山栄『経済史学』（東洋経済新報社，1970年）65－72頁。そこで挙げられているのは Alexander Gerschenkron, ***Economic Backwardness in Historical Perspective*** (Harvard UP, 1962) であるが，その後の成果は do, ***Historical Continuity and Other Essays*** (Harvard UP, 1968) にまとめられている。

(3) A. Gerschenkron, ***Europe in the Russian Mirror. Four Lectures in Economic History*** (Cambridge UP, 1970)

(4) Ibid, p. 9（Ⅰ，Ⅱでこの問題が，Ⅲ，Ⅳでは重商主義の問題が取り上げられている。）

(5) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』梶山力・大塚久雄訳（岩波書店，昭和30，37年）

(6) Valentine. T. Bill, ***The Forgotton Class. The Russian Bourgeoise from the Earliest Beginnings to 1900*** (New York, 1959)

た。そこで彼は，「西洋のプロテスタンティズムの教義がヨーロッパとアメリカで為したといわれるように，ロシアの分離派の宗教的情熱は，謹直な経済的道徳と訓練を刺激したかどうか」，換言すれば「ロシアの分離派の社会的並びに経済的役割は，ヨーロッパのカルヴィニズム及びアメリカのプロテスタンティズムに比較しうるであろうか」という問題を提起し，それに対して次のような結論を引き出した。即ち「ロシアにおける資本主義の勃興とブルジョアジーの出現にたいする分離派の貢献は，最も重要なものであった」[7]，と。

ビルの著作は，上述の問題視角からの分離派教徒の経済活動について素描の域をでないものであったが，以来西欧のカルヴィニズム，プロテスタンティズムとロシアの分離派とのあいだにみられる「パラレルな現象」は，欧米のロシア（経済）史家によって好んで取り上げられ，触れられたのである。[8] そして1965年にはW. L. ブラックウエルがこのテーマについて本格的な論文を発表した。[9]

ブラックウエルは，ほぼ一世紀に及ぶ迫害，逃亡，分散そして内部分裂ののち，エカチェリナⅡ世の「啓蒙」政策により，18世紀末ニコン以前の「聖なる首都」モスクワへの帰還を許された分離派が，かつての仲間の埋葬地（cemetery, кладовище）を中心に二つの共同体（ロゴジュスクとプレオブラジェンスク）を形成するに至った歴史的過程，そしてこれらの共同体が19世紀初めには市の主要な工業地帯，とりわけ織物工業の中心地となった経緯，また共同体が当時で最も富裕な商工業的企業家を提供したこと，更にこうして社会的及び宗教的理想のこの世での実現にほかならなかった共同体とその結束が，その第二世代の資本家的個人主義の精神，私有財産意識に道を譲り，またニコライⅠ世統治

(7) Ibid, pp 82－83, 108. ビルより一足早く，次のものもある。P. Kovalevsky, "Le Raskol et son rôle dans le dévelopment industriel de la Russe", *Archives de sociologie des religions*, Ⅲ (1957) pp. 37－56（筆者未見）

(8) 例えば Jerom. Blum, *Lord and Peasant in Russia from Ninth to Nineteenth Century* (Princeton UP, 1961) p. 301, 310. James. H. Billington, *The Icon and Axe. An Interpretive History of Russian Culture* (New York, 1966) p. 193 等がある。

(9) William. L. Blackwell, "The Old Believers and the Rise of Private Industrial Enterprise in Early Nineteenth Century Moscow," *Slavic Review*, No. 24, 1965.

末期の迫害によって衰退へ向ったこと，等々について従来の散発的な文献，同時代のヨーロッパ人の旅行記，そしてとりわけ警察報告書を用いて明らかにしたのである。

そして最後に彼は，分離派の経済活動についてソ連の研究者——ツァーリズムとの闘争に進歩的でデモクラティックな面をみると同時に，宗教というスクリーンの背後で働いている資本主義的搾取者の側面も指摘する[10]——とも，「ルロア＝ボリュウやマックス・ウェーバーのような秀れた学者」[11]とも異なる見解を提示している。即ちブラックウエルによれば，分離派は宗教的マイノリティーあるいはアウト・カーストとして存在し，社会的にも劣位にあった。従って信仰と生き残りの手段として，厳格で訓練された，自足的な宗教的共同体に結集した彼らは，「伝統的な，承認された社会諸階層には許されなかった」商業へ活路をみいだした。こうしてロシアの工業化の開始時に共同体活動を始めた彼らは，商業的そして工業的な社会的諸機能の多くを引き受けるようになったのである。[12]

ブラックウエルと同じく，分離派とカルヴィニズムの「際立ったパラレル」の主張を，「厳密でも，多産でもない」と批判しているのが，ロシア北部の分離派教徒（ウィグ共同体）について，欧米ではもちろんはじめての優れたケー

(10) ソ連におけるほとんど唯一の文献が次のものである。П. Г. Рындзюнский, "Старообрядческая организаиция в условиях развития промышленного капитализма." «Вопросы истории религии и атеизма» I (1950), стр. 188－248.（筆者未見）。

(11) ルロア＝ボリュウは，1880年代に既に次のような指摘をしている。「分離派の商業のうえでの繁栄は，イングランドやアメリカの種々のプロテスタント諸教派のそれとうまく比較しうる。ピューリタン，クェーカー，あるいはメソディストと同じく分離派には，アングロ＝サクソン民族と同じく大ロシア民族には，実践的センスが神学的精神とよく調和しており，そしてビジネスへの方向は宗教的惑いと両立しえないものではなかった」。Anatole Leroy-Beaulieu, ***The Empire of the Tsars and the Russians*** (New York, 1902－05) Ⅲ, pp. 338－339 但し仏語原版は (Paris, 1881－89) である。有馬達郎氏は，ルロア＝ボリュウのような比定を批判している。同『ロシア工業史研究』（東大出版会，1973年）297頁。

(12) この論文は W. L. Blackwell, ***The Beginnings of Russian Industrialization. 1800－1860*** (Princeton UP, 1968) に収められた。

ス・スタディを発表した R. O. クルメイである。[13] 彼によれば，ウェーバーの仮説の「隅石は，新しい倫理的態度と新しい行為の型をつくりだしたカルヴィニズムの特別の教義への彼の強調にある」。したがって「もし神学の教義が経済行為を決定するなら」，分離派と正教会には教義のうえで本質的な違いはないのだから，同程度の経済的成功をおさめたはずである。だが実際はそうでなかった。従って分離派は「敵対的王国における宗教的少数派」として捉えられなければならず，彼らは「カルヴィニストではなくユダヤ人に似ていた」。こうしてパーリア (pariah) としての彼らの社会的地位が，「客観的かつ非人間的な方法で」伝統的なビジネス技術の適用を促進したのである。

クルメイは以上のように，分離派の経済活動をユダヤ人のそれと同じ性格のものと看做したのであるが，但しブラックウエルのように，従ってウェーバーの仮説は分離派については適用されない，という結論で済ませるのではなく，これをウェーバーの宗教社会学のカテゴリーの枠内で説明できる，と考えているのである。[15]

さて以上のような研究史を念頭において，ガーシェンクロンの所説を多少詳しく紹介しておこう。彼はまず，分離派の発生の契機となった総主教ニコンによる17世紀半ばの教会改革の原因を，16世紀以前にさかのぼって検討し，それが当時のモスクワ国家の「宗教的地方主義」(religious provincialism) の結果にすぎなかった，という解釈を示す。即ちキエフ時代に正教会の信仰を受けいれたロシアは，その後，国の中心が北へ移動したことにより，ビザンツ神学から長期間にわたり孤立してしまい，その間に聖書と教会儀式において，ギリシ

(13) Robert. O. Crummey, *The Old Believers and the World of Antichrist. Vyg Community and Russian State. 1694-1855.* (Wisconsin UP, 1970) 本書については拙稿「分離派教徒の世界」『人文研究』(小樽商科大学) 53輯，1977年参照。また A. И. Клибанов, «Народная социальная утопия в России. период феодализма». М., 1977, стр. 176-177 も本書に触れている。

(14) R. O. Crummey, op. cit., pp. 135-137.

(15) 彼は M. Weber, *The Soliology of Religion.* tr by. E. Fischoff (Boston, 1964) pp. 250-258 の参照を求めている。M・ウェーバー『宗教社会学』武藤一雄ほか訳（創文社，1976年）309-319頁。

ャ教会からの様々な逸脱が生じたのである（「怠惰な写字生は言葉を省略し，熱心なものは付加を発見して用い，無学なものは単にそれを曲げた」）。16世紀初めには既に，改革への試みがみられたが，この改革を緊急なものにしたのは，17世紀における南方への拡張政策であった。この時「ギリシャ教会との，テキストと儀式における一致が国の外交政策と野望の重要な要素となった。モスクワの宗教的地方主義は，もはや維持されえなかった」のである。ニコンによる教会改革はこうした政策の産物にほかならない。従ってその改革を拒否し，古い儀式を守るため正教会を離れた分離派の思想史のなかに，西欧の宗教改革の如き思想，即ち「預定，無条件の撰び，職業のような概念」を発見することができないのも当然である。「異端の大部分の教義は，また正教会のそれでもあった」のである。[16]

他方で，分離派が19世紀ロシアの経済生活において果した役割を疑うことはできない。彼らによる「ロシアの企業家精神への貢献についての大いなる強調なしに」19世紀末の偉大な工業化に先立つ年月の歴史は書きえないからである。企業家としてかなりの成功をおさめ，数百万ルーブリの資産を蓄え，「商人王国」の基礎を築いた数多くの分離派教徒の存在，という一般的像は充分に明白なのである。世紀末までは国の最も重要な産業であった織物工業への彼らの貢献，そして彼らの多くは身分の低い農民の出身であった，という事実も疑いえない。では独立した教義内容を欠き，外見上はまったく保守的で非合理的な宗教運動の支持者であった彼らが，経済活動においては合理的で，熱烈な「近代化主義者」(modernizers) として現われた，というパラドキシカルな現象は，どのように説明されるべきなのか。ここで社会集団のなかでの分離派の地位，という問題に視点を据えなければならない。[17]

ガーシェンクロンは，続けて可成りの頁をさいて分離派にたいする政府の迫害と抑圧の諸々の事実を述べたあとで，正教会の囲へ復帰させることを目的と[18]

(16) A. Gerschenkron, *Europe in the Russian Mirror*, pp. 11－17.
(17) Ibid., pp., 17－22.
(18) Ibid., pp. 23－30. 宗教的な寛容が実現されるのは，1905年の第一次ロシア革命の時であった。

した諸政策は失敗したことを指摘すると同時に，この「迫害と差別の二世紀」が「グループの社会学的様相とそれに属する個々人の業績」を形成するうえで決定的であった点を強調する。即ち初期の如き極端な弾圧策こそみられないにせよ，またエカテリナⅡ世の「ヨリ自由な時代」を間に挾んでいたが，政府の一貫した不寛容政策は分離派に対して防衛的リアクションの形成へ導いた。即ち彼らは他者に対して「道徳的優越性の感情をうちたて，そしてそれを明示，立証する習慣を発展させることにより，その感情を支えつづけた」。ここから分離派教徒に特徴的とされる，清廉，正直，信頼感，倹約，勤勉そして節約という諸々の特性がうみだされてきたのである。また金儲け，富の蓄積にたいする彼らの態度も，残りの住民——農耕こそ主のよろこび給う活動と考え，富の獲得にたいしては敵対的な価値体系を持っていた——とは異なり，分離派にとって貨幣の獲得は，教会の諸機能の継続，そして外部からの大小の抑圧を回避するために必要不可欠と認識されていたのである。[19]

こうして確かに「分離派の企業家は，全体としてマックス・ウェーバーが特殊資本家的精神とみなしたがった特質を示した」。しかしこの価値体系の源泉は，以上の説明から既に明瞭な如く，分離派の教義ではなく，グループのおかれた「特殊な社会的地位」に由来したのである。職業の思想そのものは，ウェーバーがカルヴィニズムへ帰属させたものとは，まったく異なる意味を持っていた。結論を引こう。「彼らのケースは次のことを示唆している。即ち有罪を宣告され，迫害されたグループの社会的状態は，そうしたグループのメンバーが利益のあがる経済的諸活動に従事し，マックス・ウェーバーが『資本家的精神』に特有な附属物と考えていた特色を発展させるのに充分な推進力を与えること，である」。[20]

(19) Ibid., pp. 30－36.

(20) Ibid., p. 37. ガーシェンクロンは，ウェーバー論文のソースについてウィリアム・ペティの『政治算術』やウェルナー・ゾムバルトの『近代資本主義』を引きながら「ある疑念」を表明しているが，ここでは扱えない。但彼が，ウェーバー論文より数年前に，分離派の経済活動とロシア社会集団内の少数派の地位との歴史的関連を研究した G. von. Schulze-Gaeverniz, *Volkswirtschaftliche Studien aus Russland* (Leipzig, 1889) pp. 76－77, 86ff を挙げて注意を換起していることは

ガーシェンクロンによる分離派とその経済活動そしてウェーバーの仮説との関連についての以上の見解は，「実証」的経済史研究というよりも，従来の諸成果のうえに立った，きわめて整然たる論理的整理の試みである，といった方がよいであろう。また最後に引いたその結論も，従来のブラックウェル等の見解と大きく重なり合うものということができる。と同時に，我々はロシアの資本主義（工業化）の発展全体における企業家としての分離派教徒の位置づけという点では，ガーシェンクロン独自のものがそこにみられることに注意しなければならない。即ち彼は，先の結論を引きだしたのち，次のように述べている。資本主義といいその精神といい，それらのタームが工業発展の数量的局面を持ちえないならば，経済史家にとっては余り助けにならない。この点ロシアの資本主義が，19世紀末まで時を打たなかったのは，意味深長である。しかも資本主義発展のこの決定的局面において分離派の貢献は微少でしかなかった，という事実は，企業家は社会のあらゆる階層から現われると述べたシュムペーターの基本的見解に支持を与えるものである。[21]

こうしてガーシェンクロンは，国家に懐疑を抱いていた分離派出身の企業家と「伝統によって縛られない，西洋と密接な商業的，知的接触を保ち，そして政府当局と一緒に働くことを熱望している新しい人間」である19世紀末の企業家との間の精神的連続性（spiritual continuity）を否定した。換言すれば，ロシア資本主義の大躍進期の担い手は，分離派とは精神的を繋がりを欠いた，「新しい人間」であり，分離派の経済活動が大きな成果を挙げた時代は，ロシア資本主義のいわば前史である，ということになる。この点においてガーシェンクロンの所説は，他の研究者のそれと大きく異なる，というよりもロシアの経済

ルロア＝ボリュウの研究（注11）とともに，ウェーバー論文の学説史的背景を探るうえで貴重な指摘であると思う。(Ibid., p. 47) なお肥前栄一「シュルツェ＝ゲーヴァニッツのロシア社会論」『思想』549号，1970年も参照。

(21) A. Gerschenkron, op. cit., p. 47. 彼はここで19世紀末の企業家について具体的には何も述べておらず，また文献を挙げているわけでもないが，A. Gerschenkron, "Social Attitudes, Entrepreneurship, and Economic Development," ***Explorations in Entreprenurial History***, vol. Vl, No. 1, 1953 (in, ***Economic Backwardness Historical Perspectiue***, pp. 52－71.) Henry Rosovsky, "The Serf Entrepreneur in Russia," Ibid., vol. Vl, No. 3 pp. 207－233. を参照。

発展と企業家の活動についてヨリ広いパースペクティヴを前提とした立論である，と判断される。しかしこの点は彼の他の諸研究との関連で明らかにされるべき，独立の課題であろう。[22]

(三)

A・ガーシェンクロンの小著が出版されたと同じ1970年，サミュエル・H・バロンは「ウェーバーの仮説と『初期近代』ロシアにおける資本家的発展の失敗」というユニークな表題を持つ論文を発表した。[23] しかもバロンは，この論文での分析視角を基礎に据えて，17—18世紀初頭の特権商人に関する一連の注目すべき成果を公けにしたのである。[24] 特権商人に関するバロンのいわば三部作は，欧米ではもちろん，ソヴェト史学でもまったく手薄な分野に正面から切り

(22) 本書のⅢ，Ⅳを含めて，ガーシェンクロンの諸研究にたいしては，ソ連のオレギナ女史から批判が出され，それを契機に論争にまで発展している。И. Н. Олегина, "Капиталистическая и социалистическая индустриализация в трактовке А. Гершенкрона." «История СССР» 1972, No. 2, A. Gerschenkron, "Criticism from Afar: A Reply." *Soviet Studies*, vol. XXV, No. 2, 1973, И.Н. Олегина, "Методогические вопросы исторической науки." «ВЛУ» 1976, № 20, её же, "О причинности, необходмости и закономерности в истории." «ВЛУ». 1977, № 2, A. Gerschenkron, "Criticism from Afar: Another Reply." *Soviet Studies*, vol. XXIX, No. 4, 1977. だが分離派の経済活動についての評価には何ら触れられていない。

(23) Samuel.H. Baron. "The Weber Thesis and and the Failure of Capitalist Development in "Early Modern" Russia." *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas, 18* (Sep. 1970). pp. 321－336 なおバロンは『プレハーノフ：ロシア・マルクス主義の父』白石治朗ほか訳（恒文社，1978年，原版は1963年）という我が国でも評価の高い研究の著者である。田中真晴『ロシア経済思想史の研究』（ミネルヴァ書房，1968年）146－151頁ほか参照。その後ピョートル以前，とりわけ17世紀ロシアの商人・都市研究へ "venture back" した，という研究歴を持ち，その最初の成果が *The Travels of Olearius in 17th-Century Russia.* tr. and ed. by S. H. Baron. (Stanford UP, 1967) である。

(24) S. H. Baron, "Who Were the GOSTI?" *California Slavic Studies*, vol. VII, 1973, pp. 1－40. do, "Vasilii Shorin: Seventeenth Century Russian Merchant Extraordinary." *Canadian-American Slavic Studies*, VI, 4. 1972, pp. 503－548. do, "The Fate of the GOSTI in the Reign of Peter the Great." *Cahiers du Monde Russe et Sovietique*. XIV, No. 4. 1973, pp. 488－512.

込んだ意欲的な研究であるが，彼の視角はソ連の経済史家とは明らかに異なり，(二)で取り上げた諸研究に根本ではつながっている，と思われる。そこで我々は，1970年論文を中心にバロンの主張を紹介し，特権商人研究については脚注で補足するにとどめたい。

17世紀にモスクワを訪れたヨーロッパの人々が当時の経済事情について共通して抱いた特徴は，バロンの言葉でいうなら「我々が近代資本主義に連想するようなダイナミズムの欠如」にほかならない。実際ロシアは19世紀前半まで，資本主義的発展に失敗したのだが，この失敗の鍵をにぎっているのがブルジョアジーの問題なのである。ところがソヴェトの文献——欧米ではもちろん——では，ロシアにおけるブルジョアジーの歴史についてあまり研究されておらず，ロシアは「農奴制のために商業も産業も持っていない」という手短かな説明で片付けられてきたのである。(25)

こうしてバロンは，従来無視されてきたロシアにおけるブルジョアジーの形成の問題を正面に据えようとするわけだが，その際この課題へアプローチする手掛りとして採り上げられるのが，マックス・ウェーバーの宗教社会学的諸研究である。即ちウェーバーは世界諸宗教の経済倫理についての研究で，プロテスタントの倫理の「機能上の等価物」の発見には失敗したが，彼の中国並びにインド文明に関する研究は，経済と宗教ではなく，文化の全体性（totality）との内的諸関連を扱うことになった。こうしてウェーバーは，本来の動機をこえて「近代資本主義の発展を抑止した歴史的，制度的な他の諸要因のテストにすすんだ」のである。ロシアに関していえば，彼は中国・インド文明に相当する著作を残さなかったが，ロシアを「その制度上の構造が資本主義の発展を育成したというより，むしろ挫いたところの非ヨーロッパ型の諸社会と一緒にしていた」と思われる。このようなウェーバーの思想は，綿密に吟味され，そして多くの批判もなされてきたが，「いぜん分析と比較研究のための有用で，稔り

(25) S. H. Baron. „The Weber Thesis." pp. 321－324. バロンはここで取り上げたV．T．ビルの研究（注6）について低い評価しか与えていない。Ibid., p. 323.

ゆたかな枠組となっている」のである。[26]

ロシアの正教会と経済活動の関連について一瞥しておこう。モスクワ・ロシアでは「利欲の精神」(acquisitive spirit) には事欠かなかった。「ロシア商人は欲張りであるだけでなく，獲物の追求において不道徳である，という西洋の観察者の判断は，ウェーバーの主張とまさに一致している」。即ちウェーバーの概念においては，プロテスタントの倫理が利欲の精神へポジティヴな抑止力を与えたこと，そしてこの結合こそが，その所産として近代資本主義をうみだしたことにあったのだが，ロシアの正教会は「商業のための情熱を少しも湿らさなかったようであるが，そうした抑止力も与えなかったようである」。この倫理的抑止力の不在が，ウェーバーにおいて近代資本主義の決定的な特徴である，合理的計算への態度や習慣の未発展を助長した，と思われる。[27]

しかしバロンは，この点を問題にしようというわけではない。ロシアの正教会の経済活動にたいする役割は，ヨリ多くの注意に価する。しかし「私は，他の歴史的並びに制度的な諸々な障害物 (blockages) がヨリ重要であった，という気がする」と述べ，そのなかでも特に「政府と商業諸階層とのあいだの関係」にマトを絞るのである。[28] この点について多少詳しく紹介しておこう。

16世紀後半にモスクワを訪れたイギリス人，フレッチャー (Giles Fletcher) はイヴァン雷帝がヒゲをはやしたロシアの住民——商業従事者を含む——について，「たびたび剃れば剃るほど，それは濃くなる」と語ったこと，そしてその結果，人々は怠惰と飲酒にふけるようになり商業は衰微したこと，を伝えているが，この事情は17世紀にもそのまま当てはまる。即ちモスクワ・ロシアの支配者は，私的な商業に対して過度の規制と限りない苛税で悩まし窒息させたのである。

---

(26) Ibid., pp. 324－325. バロンは「プロテスタンティズムのないところに資本主義はない。ロシアはプロテスタンティズムを持たなかった。故にロシアは資本主義を発展させることもできなかった」という形でのウェーバーの単純な誤解と適用を戒めているが，我々が(二)で取扱った，分離派教徒の経済活動には，ひとことも触れていない。

(27) Ibid., pp. 325－326.

(28) Ibid., pp. 329－327.

他方で，同じく17世紀後半にロシアを訪れたイギリス人，コリンズ (Samuel Collins) が，ツァーリを「国の第一の商人」と呼んだ如く，当時のツァーリ政府は自ら企業経営に排他的に熱中した。即ち17世紀のいろいろな時期に，ツァーリは「最も儲かる商業上の機会」をつぎつぎに手中にしていったのである。ヨーロッパとの穀物貿易の独占，ウォトカの製造・販売，シベリア産の良質の毛皮の独占，製塩所や漁場の経営そして森林資源の独占的利用，等々それは幅広い分野にまたがっていた。そしてこうしたツァーリの独占的な経済活動は，「ひかがみを切るような諸規制や抑圧的課税」を抱き合わされていたのである。定期市や市場の開設はある都市に限定され，その町では政府自らが倉庫や商店，売店を構えた。商人は町から町へ居住地を変えることが一般に禁止されていた一方，政府は彼らにその変更を強制しえた。ビジネスで外国へ行くためには特別の許可が必要であった。こうした一連の独占と規制が，商人諸階層の私的な利害の追求をいかに激しく打ちすえたかは，想像に難くないのである。[29]

ところで当時の商人諸階層のなかで，その最上位に位置したのがゴスチ (гость) と呼ばれた特権商人であった。[29] 最も資産のある「2，3ダース足らずの人々」[31]からなるこれら特権商人は，なによりもまず国家のために広範囲な奉仕義務を背負わされた存在であった。即ちツァーリの諸々の経済活動に実際に従事していたのは彼らであった。外国貿易及び国内商業での諸関税の徴収，ツァーリの pothouses の運営，財政に関する行政的業務，等々にたいしてその責任を負わされたのである。[32] 他方でその奉仕に対していかなる貨幣補償も与

(29) Ibid., pp. 327－330.

(30) 「ゴスチ」は既にキエフ時代に散見され，その後も遠隔地貿易に携わる人々を指して用いられた。彼らが団体形成への動きを示すのは16世紀後半のことであるが，一つの「階層」として成立したのは，ミハイル・ロマノフの商業政策，即ち地方のゴスチのモスクワへの強制移住の結果であった。S. H. Baron, Who Were the GOSTI?, pp. 4－7.

(31) 1623－1710年のほぼ90年間に，のべ79家族132名のゴスチが存在したが，最高は1685年の40名，最低は1634年の17名であった。Ibid., pp. 24－33.

(32) その他彼らは社会的エリートとして，戴冠式，婚礼，誕生，外国使節のレセプション，等に列席した。ゴスチは世襲ではなく，その勤務期間は通常一年であったがより短期の様々な業務も課せられた。Ibid., pp. 12－15.

えられなかったばかりか，自己の財産をツァーリのビジネス遂行の失敗に備えての担保物件とさえされた。

だが彼らには諸々の特権が賦与された。関税を免除されての商業，外国商人によって搬入された商品の先買権，また特殊な資源（漁場，製塩所など）の利用などである。[33] これらの諸特権が彼らに重要な金銭上の便益を与えたことは疑いない。だがそれさえ，ツァーリの移り気によって撤回されることがあった。国家はしばしば，商人から年収の10－20％を臨時の必要をみたすべく取り立てた。その際「富裕で知られていた商人は，他よりもツァーリ政府の没収情熱の犠牲になり易かった」のである。[34]

特権商人に課された重い奉仕義務は，自己のための商業能力の発展を妨げたと同時に，彼らの財産の不安定性は，ロシアにおける資本家的発展の失敗の重要な要素とみなければならない。政府の「代理商」であり「商業カウンセラー」であった彼らの成功は，ツァーリや指導的官吏との関係，即ち政治的恩寵によるところが大きかった。彼らはビジネスの眼識（business acumen）よりも，特権の維持と拡大を自らの繁栄の確実な道とみた。[35] こうした環境では，「ロシアの資本主義的先駆者（vanguard）となるべく，表面上は運命によって選ばれていた彼らにおいて，企業精神が萎縮するのも当然であった」のである。[36]

ヨリ下層の商人についてはどうか。17世紀前半にペルシャへの旅の途中，ロシアを訪れたプロイセンの人，オレアリウス（Adam Olearius）は「モスクワ

---

(33) ゴスチに任命された際，a patent or letter of privileges（жалованная грамота）をうけた。その内容は時期によって相異があるが，他に重要な項目として，所領の購入権があった。Ibid., pp. 17－19.

(34) 1654－80年にかけて，年収の5－20％の臨時賦課が9度に及んだ。Ibid., p. 22.

(35) バロンは，ゴスチの family continuity の欠如（ほとんどが一代限り）の原因について，①継承者（男）の不在，②都市蜂起の犠牲，③多大な寄付を惜しまない強い宗教心，などを挙げているが，それらに反して，ビジネスの歴史ではしばしばおこる「競争を通じての企業家の淘汰」は稀であったことを指摘している。Ibid., pp. 34－37.

(36) バロンは，ケース・スタディとして最大のゴスチであったショーリン家，またピョートルⅠ世の時代に「自然死」を運命ずけられたゴスチについて，詳細な分析をしているが，ここでは扱えない。S. H. Baron, "Vasilii Shorin," do, "The Fate of the GOSTI," 参照。

の小商人の幾人かの機略縦横」な商いぶりを賞讃している。しかし，彼らの商いの規模も利益もちっぽけなものであったし，彼らは信用（credit）に大変困っていた。こうした小商人に信用を供与したのが，ロシア国内で小売りを禁止されており，ロシア商品の入手を熱望していた外国商人であった。[37] ここに「外国商人とロシアの小商人とのあいだの共存的関係」が生まれた。特権商人は毎年のように，外国商人の排斥について政府へ請願していたが，その狙いの一つは，この共存的関係を打ち破ることにあったのである。

だが信用の不足，大商人の非協力的な姿勢，外国商人への依存という状況で，企業心のある小商人が資本を蓄え，事業を拡げる可能性は強くはなかった。たとえ成功しても彼らは，特権商人としての登録という致命的な――経済的観点からみて――影響力に服さねばならなかった。こうして「ロシアの小商人共同体からの成功した企業家という重要な一階級の出現には，一連の恐るべき障害物が存在した」のである。[38]

さて以上のような非合理的で，自滅的とも思えるモスクワ国家の経済政策は，いかなる国家の本質に根ざすものなのか。B. O. クリュチェフスキイは，モスクワ国家はその四方全域が軍事的脅威にさらされていた「軍事的ラーゲリ」に他ならず，その支配者は軍事指揮官（war lord）である，指摘した。この結果，「モスクワ国家の政治秩序においては国家に対する義務の過重原則は，私的な個人あるいは団体の利害のための余地をほとんど残さなかった。それらは中央権力の必要の犠牲とされた」のである。軍事指揮官としてのツァーリは，むろん軍事的・政治的目標を第一義，経済を第二義的なもの，と考えた。ソヴェトの学者も，17世紀には「ツァーリ体制は，国民経済をとりわけ国家財産をみたすための資源とみた。そしてその経済政策を財政的利害に従属させた」こ

(37) 17世紀のロシアには，イギリス人に代ってオランダ人が進出していたが，彼らの中からゴスチに任ぜられるものもいた。但しそのサービス（武器の供与，貸付，奢侈品）と特権は，ロシアのゴスチとは異る。Baron, "Who Were the GOSTI?" pp. 19－21.

(38) ゴスチは，гостинная сотня, суконная сотня, そして посадские люди の中から補充されたが，最後のものは稀であった。Ibid., p. 8.

とを認めているが，これはクリュチェフスキイの判断の繰返しといえるだろう。[39] こうして当時においては，長期的パースペクティヴを欠いた，経済成長のために必須な諸条件についての貧しい理解，あるいは単なる無関心が支配的であったのである。

他方で，私的な商業活動に対して重くのしかかっていた諸々の規制や課税から解放されていたツァーリの商業的事業が拡大し，確実な成功をおさめえたのは当然であった。バロンは，ツァーリの財産要求，国の資源とエネルギーをツァーリの目的に応じて利用するこうした方法を，全体主義的（totalistic）とよび，その理論と実践は資本主義の発展と両立しえないこと，即ち「初期近代ロシアにおける資本家的発展の失敗の一つの主要な理由は，全体主義への諸傾向を刻印された政治組織による，私的な経済活動に向けられた範囲の過度な限定であった」，と結論づけたのである。[40]

1970年論文におけるバロンの基本的見解，そしてその後発表された特権商人研究は，明確な視角に支えられた問題提起であり，優れた実証的研究である，と思われる。だが限られた紙幅での紹介だけでは，その理解を誤るおそれもあるので，若干の補足を加えておきたい。

第一点は，バロンがその考察を「政府と商人諸階層とのあいだの関係」に限定したことは，他の諸々の要素を考慮しない，ということではもちろんないことである。即ちバロンは，ロシアにおいて資本家的発展を妨げた「社会的そして文化的諸形態」として，農奴制，都市，通貨と信用あるいは度量衡などの諸問題，正教会の超俗性，などを念頭においており，また「資本家的発展の潜在力に逆の影響力を及ぼしたロシアの歴史的体験」についても，甚だ大雑把なが

(39) バロンはここで，クリュチェフスキイとともにマックス・ウェーバーのライトゥルギー国家論へ注意を換起しており，そして他の欧米の研究者と同じく，「農奴制」も同じ脈絡で考えている。即ち「国家への奉仕を強制された軍事的土地保有者という一階級の創出，そしてその軍事的奉仕者のために生活を保証する手段として，引き続き起った農民の緊縛は最もよく知られている」，S. H. Baron, „The Weber Thesis," pp. 333－334.

(40) Ibid., pp. 335－336.

ら言及している。[41] 我々はそれらの指摘から少なからざる示唆を得ることが出来るのだが，バロン自身は特権商人の問題のみに視野を限定したのである。

第二点は，特権商人としてのゴスチを即座に「資本主義の先駆者」と規定し，彼らの運命のなかにロシアにおける資本家的発展の失敗をみる，というバロンの視角についてである。これは端的にいえば，ソヴェト史学の主要な傾向に対する批判として提示されている。即ちソ連の経済史家の多くは，В. И. レーニンの「ロシア史の新時代（ほぼ17世紀から）」規定に従って，ロシアにおける資本主義の起源を17世紀に定め，その担い手を「資本家＝商人」（капиталисты-купцы）と看做し，数多くの研究成果をうみだしてきた。バロンはその担い手たる「商人」のなかでは，最も強力な階層であったゴスチの研究に基いて，ソ連史家の見解を真向から批判し，17世紀ロシアにおける資本家的発展の「失敗」を実証しようとしたのである。[42] 従ってここでは，ロシアにおける資本主義の起源とその担い手についてのバロンの見解が，ポジティヴな形で述べられているわけではないのである。[43]

---

(41) S. H. Baron, "The Weber Thesis." pp. 326－327.

(42) これについては，S. H. Baron, "The Transition from Feudalism to Capitalism in Russia. Major Soviet Historical Controversy." *American Historical Review*, vol. 77, No. 3, 1972, pp. 715－729 参照。なお拙稿でもこの議論に触れたことがある。（『一橋研究』第28号，1974年）。

(43) この点で参考になるのは，Richard Pipes, *Russia under the Old Regime* (New York, 1974) Chap. 8 である。だがバロン自身は10年に及ぶ17世紀経済史研究を打ち切って，再びプレハーノフと（ソヴエト史学）をめぐる問題へ立ち帰ったかにみえる。（前掲『プレーハーノフ』の「日本語版へのまえがき」参照）。